



関西大学北陽中学校・中野裕文教諭

新聞活用のメリットは

NIEを実践している関西大学北陽中学校（大阪市東淀川区）は、2年生の生徒らが関大の理工系研究室を取材して記事を執筆し、新聞に仕上げる作業に取り組んでいる。産経新聞は、記者を学校に派遣し、取材の心構えやポイント、記事の書き方の講義を行うなどしてサポートしている。

活動の中心となっている中野裕文教諭は、新聞記事を授業で活用するメリットについて、「生徒自身が考えて整理し、それを文章としてまとめる。その一連の流れを、体系立てて学ぶ上で非常に有効な手段」と強調する。

新聞を授業に取り入れるためには、教材として使う記事を選択し、そろえるところから重要になるという。

「例えば憲法9条の改正について、賛否両論の議論をさせた



新聞のレイアウトを学ぶ講習会で、写真をトリミングした理由を説明する生徒
＝6月9日、関西大学北陽中学校

生徒投稿 かけがえない経験に

いと思ひ、それぞれの立場から書かれた記事を集めるにも、図書館でスクラップを練ったり、各新聞社に尋ねてみるなど、相当の労力がかかる」と中野教諭は説明する。

ただ、NIEによって、現実には生徒たちに変化があらわれるという。授業では、ニュースなどの社会的な事象をあつかった記事だけでなく、同世代の子供たちが書いた投書なども、積極的に読ませている。

「自分の意見を持っていても周囲の目が気になり、発表することには消極的になりがち。新聞を使った授業をへて書かせる」と、しっかりした意見を持っていることが多い。そういったことに気づけるのも、NIEならではかもしれない。

新聞に触れた生徒たちは、その情報の多彰さに驚く。それまで、テレビ欄しか見なかった生徒が、社会面や文化面など、興味を持ってさまざまなページを読むようになるという。

同校では、NIEの効果を高めるため、産経新聞の25歳以下の若者たちの投稿欄「ひこばえ倶楽部」への積極的な投稿を促している。中野教諭は「何度も繰り返しすることが文章力の向上にもつながる。自分たちの考えを文章でまとめ、それが多くの人の目に触れる。これが生徒たちにとって、かけがえない経験となる」と話している。